

大学を核とした子育て支援事業への参加が学生相互の気づきに 与える影響

－異学年集団によるIPU子育て支援事業「わくわくキッズ広場」への参加を通して－

The participation in child care support project that assumed a university a nucleus is
the influence to give to notice of student aspect each other

－Through the participation in IPU child care support project
“WAKUWAKU KID’S HIROBA” by the study class of various grades－

次世代教育学部乳幼児教育学科

古田 康生

FURUTA, Yasuo

Department of Early childhood Education
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：子育て支援実践演習，子育て支援プログラム，異学年集団授業，気づき

Abstract

Background : After opening a course in new subject child care support practice I for the purpose of the childminder (childcare person, kindergarten teacher) training that child care support was possible in IPU, the attendance student of the first year was comprised in a group of various grades. Therefore the new class of Support practice I and a plan, the administration of “HIROBA” were developed in the learning group of upper-class students with the experience of childcare training and the student (kindergarten teacher) teaching training and lower-grade students without training experience.

Objective : The purpose of this study was to research about “notices” of student aspect each other in the process of the plan and administration of “HIROBA” in the various study grades group

Methods : For 35 (23 second graders, six third grader and fourth graders six) childcare students was researched notice by the questionnaire by the free description method.

Results : (1) On the childcare student of 35, there were total 73 items, and the total number of the notices was 279. (2) All students could notice something, but there was admitted statistical significant difference in a second grader and the fourth graders a lot of upper-class students. (3) While is with mind about the whole; in student aspect each other noticed, and an item was 63.01%, and there tended to be more second graders than the three or four years student. As for this, a second grader observes the action of the upper-class student, and it is thought that I can discover a self-problem by receiving or direct instruction. (4) “Relation with the child” that there was the most in an item, and 82.61% of second graders replied it. As for this, it is guessed a provided self problem by the comparison between relation and relation of second grader oneself of parent and child and the upper-class student who participated in the HIROBA when I replied it. (5)The number of the items increased as a school year rose. However, the comparison of the item with mind according to the participation frequency of the second grader. I notice so that there is much participation frequency, but I significantly increase, and it is thought that participation experience lays more notices and finding. (6) The negative answer was not seen only

by an affirmative answer in this investigation. In addition, 91.43% of target students hoped for the participation in HIROBA after the next time and were connected with high sense of purpose not only student aspect each other learned through support practice I, but also to want to keep it alive in the next HIROBA.

Conclusion : Learning in the heretical study year is various kinds of notices and finding existence effects and should continue in the future

Keywords : practical seminar of childrearing support I, child-rearing program, class of various grades, number of notices

1 はじめに（研究の背景と子育て実践演習Ⅰ及びわくわくキッズ広場）

環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科（以下、本学とする）では、平成23年度より地域の子育て支援が担える保育士及び幼稚園教諭を養成するため、「子育て支援実践演習Ⅰ（以下、実践演習Ⅰとする）」と「子育て支援実践演習Ⅱ」の新規科目を設けた。

この実践演習Ⅰは、子育て支援の基礎理論を学ぶと同時に、岡山県備前県民局の助成を受けて、本学及び、IPU子育て支援プロジェクトが主催する「わくわくキッズ広場（以下、広場とする）」に運営スタッフとして参加・参画する授業となっている。すなわち、「広場」の企画と運営に携わり、参加する親子と実際に関わり合うことにより実践的に子育て支援が学べるように授業内容が構成されている。

なお、この実践演習Ⅰ・Ⅱの履修者は、本学にて開講される所定の科目を履修し、広場に定められた回数分の参加・参画の基準を満たすと「子育て支援プロジェクトリーダー[®]（主催：こども教育支援財団）」が取得できるようになっている。

平成23年度は、実践演習Ⅰが開講初年度であるため履修希望者が多学年にわたり、異学年集団による授業展開が余儀なくされた。この異学年集団による基礎理論学習と広場の企画・運営という実践的な学習過程は、学生相互に多くの“気づき”を促すことが期待できる。つまり、保育実習Ⅰ及びⅡ、Ⅲや教育実習（幼稚園）の経験を通して幼児やその保護者との関わり経験がある4年生や3年生と実習経験が全くない2年生では、「その経験知」に差があると推測され、実践演習Ⅰにおいて、上級生が下級生への直接的指導場面（指導する過程や指導を受ける過程）やその観察、同級生の取り組み方、または広場での実際に地域の親子との関わり合いやその進行においてより多くの“気づき”が生じると予測される。

2 保育士養成校における子育て支援に関する授業の研究

これまで数多くの「保育士養成校における保護者支援・子育て支援に関連する授業」の研究報告がある。それは、2008年に告示された保育所保育指針に「保護者支援」が明示され、保育士に保護者と関わる義務が課されことや、2008年に告示された幼稚園教育要領に「地域における幼児期の教育のセンターとしての役割」¹⁾示されたことにより、保育士養成校（多くの養成校が幼稚園教諭養成校でもある）における養成カリキュラムが改訂（2011）され保護者支援や子育て支援に関する授業科目が開講されるようになったためである。

土居（2011）²⁾は、全国21の養成校の「子育て支援と学生との関わり」について調査し、大学の施設と人材、学生を生かし様々な形で支援が展開されていると報告している。その関わり方の傾向は、「①関わり方には、学内に独自の子育て支援センターを設置して地域の親子が利用し、その活動の一部に学生が参加する場合と学外の子育て支援施設に出向き活動に参加する場合がある、②参加方法は、行事の参加、遊びや活動（出し物）の提供が多い、③授業として行う場合は、独自科目を開講する場合と既存の乳児保育、家族援助論、（保育）総合演習、ゼミナールの科目にて実施している、④体験回数は、1回から9回、⑤体験内容は、関与観察、参加者のお手伝い、遊びの提供、遊びや行事の企画まで多様である」とまとめ、多様な支援活動により学生が「子育て支援」について理解できる内容を取り上げ、どの様に内容をまとめ、定着を促すか工夫が必要である、と提言している。また、子育て支援力を育む授業内容を実践して検討したところ、①子育て支援力の養成には理論（授業）と体験（実習）が欠かせない、②初対面の親子との対応での「子どもを預かって欲しい」などの依頼をされ、必要とされることにより自信が生まれ、親子とのふれあいを深めら

れる、③本読みや親子との関わりにより技術としての保育技術の必要性を感じている、と報告している。

柴倉ら(2008)³⁾は、学内での子育て支援事業「なかよし広場」を開催し、子ども・保護者・学生の相互作用からみた支援のあり方を実証的に考察している。学生は、子育て支援にかかわる経験により「準備や当日の運営、さらには子どもや保護者の様子を間近に感じることで、子どもの心身の発達を確認し、専門的視野を広げ、社会人としての態度、すなわち社会的スキルに繋がったと推察される」、と報告している。

幼稚園⁴⁾や保育所⁵⁾を核とした子育て支援とは異なり、保育士養成校である大学の子育て支援には、子育て支援・保護者支援に加えて、将来の保育を担う保育や幼児教育を専攻する学生(以下、保育学生とする)にとっても貴重な経験の機会でもありと考えられる。

3 研究目的

本研究では、異学年集団による演習授業(実践演習Ⅰ)と子育て支援の現場演習(広場の企画・運営)の取り組みの過程において、学生が相互に気づき、学び合うことができるか調査することを目的とした。自由記述法による記載内容からキーワードを抽出することにより、期待通りに“気づき”ができていないかを検討し、その抽出された項目の内、特に「学生相互による気づき」を考察することで、異学年で構成された集団の学習過程の有用性を検証することを目的とした。つまり、「子育て支援プロジェクトリーダー」の取得のために必要な演習科目「子育て支援実践演習Ⅰ」と現場演習「わくわくキッズ広場」およびその企画・運営を異学年(2～4年生)集団による学習を通しての“気づき”を自由記述法により調査し、考察を加えることとした。特に、学年間と広場への参加頻度による比較を試み、次年度以降の授業カリキュラムを検討する上での基礎的資料を得ようとするものである。

4 研究方法

(1) 調査対象者

環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科に属し、保育・幼児教育を専攻する学生35人とした。対象となった全学生が、「子育て支援実践演習Ⅰ」を履修し、平成23年度前期に1回以上は「わくわくキッズ広場」の企画・運営に携わった者とした。

(2) 対象授業「子育て支援演習Ⅰ」(前期)

表1に「実践演習Ⅰ(前期)」の授業の目的及び授業内容を示した。この授業は、通年科目である。本研究での調査対象期間は前期とし、その期間の主な授業内容は、「運動遊び」や「ホスリタリティートレーニング」であった。

(3) IPU子育て支援プロジェクト主催「わくわくキッズ広場」

表2にIPU子育て支援プロジェクトが主催する「わくわくキッズ広場」の年間計画とその活動内容を示した。この「広場」は、「実践演習Ⅰ」の学習成果を発揮する場であり、広場の企画・運営の実践を通して「子育て支援」の経験を積み上げる機会でもある。この「広場」の運営にあたって、学生は、幼児や児童、親子との活動を企画立案するだけでなく、運営面での、来場者(参加者)の車の誘導、受付、会場案内、参加者へのお土産づくり、保護者対応、アンケートの実施、必要備品・物品の購入、会場整備等あらゆる役割を分担して担った。

(4) 調査期間

気づきに関する調査用紙は、子育て支援実習Ⅰ(前期)の授業、7月14日に配布され、授業最終日7月21日に回収された。回収率は100%であった。

(5) 調査方法

本研究で調査した“気づき”は自由記述法により記載された文章中から、子育て支援に携わる専門家がキーワードを抽出し、それを分類してまとめる方法とした。調査対象となった保育学生には「実践演習Ⅰと広場の企画・運営にて気づいたこと」と「実践演習Ⅰと広場の企画・運営を通して受講仲間の言動・行動で気づいたこと」の2点を記載するよう求めた。抽出された「気づき項目」は「件数」として対象学生のポイントとした。

(6) 統計処理

本研究の結果は、平均値±標準偏差で示した。気づき項目数に関する学年間の比較、広場への参加頻度による比較は、一元配置分散分析と多重比較検定を用い、危険率5%未満を持って有意と判定した。

表1 子育て支援実践演習Ⅰ（前期）シラバス

授業の目標と概要

保育所や幼稚園が地域の子育て支援の拠点としての機能が求められる現在、保育士と幼稚園教諭はその専門性を発揮する機会が多岐にわたっている。本科目は、地域の子育て支援事業に実際に参加し、実践を通して学びを深めるという特異的な科目構造である。具体的には、前期に地域の乳幼児や児童とその保護者を対象とした子育て支援事業に参加し、そこで展開される身体運動を伴う活動の補助ができる能力を身に付ける。これにより、事業に参画して企画・運営が担える基礎を習得して「子育て支援実践演習Ⅱ」につなげる。

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	子育て支援事業の目的と年間計画、資格取得の方法
2	ホスピタリティートレーニング1	挨拶トレーニング、傾聴トレーニング
3	ホスピタリティートレーニング2	話し方トレーニング
4	アイスブレイク技法1	いろいろな集団を対象としたアイスブレイク
5	アイスブレイク技法2	親子を対象としたアイスブレイク
6	キッズスポーツ（サッカー）の事例1	幼稚園での正課教育カリキュラムの支援事例
7	キッズスポーツ（サッカー）の事例2	異年齢集団での指導の実際
8	キッズスポーツ（サッカー）の事例3	親子交流サッカー教室の支援事例
9	親子交流体操プログラム1	忍者体操教室イベント、じゃれつき遊び
10	親子交流体操プログラム2	小道具を使った運動遊び（風船、布、新聞紙、ボール等）
11	親子交流体操プログラム	移動遊具サーキットプログラム（平均台、跳び箱、マット、鉄棒）
12	親子交流身体表現プログラム	模倣遊び、身体活動のあるリズム遊び、ダンス
13	野外でできる親子交流プログラム	自然環境活用した遊び場づくり
14	子育て支援事業の実際1	事業運営徳法、役割分担、広報活動、資金獲得法
15	子育て支援事業の実際2	前期の事業に参加してのふり返り

表2 平成23年度 IPU子育て支援事業「わくわくキッズ広場」活動内容

回	年月日	活動内容	参加者数
1	2011年5月15日	親子で運動遊びをしよう①	注1)
2	6月19日	親子で運動遊びをしよう②	
3	7月3日	お話の広場	
4	8月21日	みんなで作ろう（おもちゃ製作の広場）	
5	10月2日	親子で運動遊びをしよう③	
6	11月13日	お話の広場	
7	11月27日	親子で運動遊びをしよう④	
8	12月11日	クリスマスこどもコンサート	
9	2012年1月22日	親子マラソン大会	
10	2月12日	親子でクッキング	

注1)：本研究の調査項目「気づき」は、1～3回に実施された子育て支援実践演習Ⅰとわくわくキッズ広場を調査対象とした。

(7) 倫理的配慮

調査を始めるに当たり、対象者には参加は自由意志であること、プライバシーと匿名性は厳守され、個人情報には本研究者のみが把握し、外部には一切公表しないこと、調査方法、本調査への参加による危険性を口頭にて十分に説明をし、同意を得てから開始した。

4 結果と考察

(1) 対象学生の特徴（性別、学年、実習経験の有無）

今回、調査対象となった保育学生は35人であった。表3に対象となった保育学生の学年及び人数、男女比、保育実習と教育実習経験の有無を示した。

2年生は、保育実習と教育実習の経験がなく、子どもとの関わりは短時間の保育園と幼稚園での見学だけであった。他方、3年生は、保育実習Ⅰにて児童養護施設等での実習と保育所での実習の経験を有していた。また、4年生は保育所実習Ⅰ及びⅡ（保育所）と教育実習（幼稚園）の経験がある学生であった。

表3 調査対象学生の特徴

学年	人数	男子学生/ 女子学生	保育実習 I 2年2月	実習経験 保育実習 II 3年2月	教育実習 (幼稚園) 3年9月
1	23	15/8			
2	6	0/6	済		
3	6	1/5	済	済	済
計	35	16/19			

(2) 対象学生別の全気づき項目数及び件数 (学年, 広場参加頻度)

実践演習 I と広場の企画・運営の過程での自由記述法から抽出された気づきののべ件数は、279件であった。気づき項目の総数は、73項目であった。

一人あたりの気づき項目数平均値は7.97件であった。学年間の比較をした結果を表4に示した。学年間に統計的有意差が認められ、4年生は2年生より多くの気づきをしていることが明らかとなった。2年生と3年生、3年生と4年生には差が認められなかった。

表4 学年別の全気づき項目の件数

学年	2年	3年	4年	有意差
n	23	6	6	
mean	7.23	10.00	11.50	2年<4年
SD	±3.73	±2.97	±2.17282	

*meanは平均値, SDは標準偏差

(3) 全ての気づきの内容 (全学年件数と学年別件数)

表5に全ての気づき項目 (5件以上) を示した。子どもとの関わり方に関する気づきが最も多く、その内容としては「上級生の積極的な関わり」、「人見知りの子どもへの関わり」、「発達に応じた関わり」といった記載が多かった。学年別の項目数では、2年生の82.81%が「子どもとの関わり方」をあげており、上級生の関わり方を観察し、自己課題としていることが明らかとなった。次いで、「事前準備・段取り」が多く挙げられた。この項目は全ての学年に共通して多く認められた。この理由として、一回の広場の開催に向け3、4回の授業時間を充て、履修学生全員がその企画の打ち合わせと準備に取り組み、何らかの役割を担っていたことが影響していると考えられる。また、事前準備は、全て学生が主体となり計画され進められたことが背景にあると考えられる。その過程で、上級生や同級生の「気配り」や「リーダーシップ」、役割を遂行することで「成長の機会となる」といったことに気づき、これらの項目が気づき項目数として多く

なると推察される。

2年生の気づき項目として「コミュニケーション能力」「発達段階の知識」「取り組む姿勢・態度」「人前で話す」「イメージ・想像力」が多く挙げられた。これらは、全て上級生の実践演習 I で下級生に対する指導や広場での親子に対する関わる過程で2年生が観察した事項であった。

一方、上級生に気づき項目として多かったのが「協力・協調性」であった。これは、上級生がリーダーとなって異学年集団をまとめる過程で感じたことが背景にあると考えられる。

(4) 学生相互による気づき項目の件数 (全学年, 学年別)

表6は、学生相互の気づいた項目である。つまり、学生が実践演習 I での学習と広場の運営といった種々の過程において相互に気づき、学んだ項目である。前述の「全気づき項目」に加えて、「上下関係・信頼関係」「上級生との経験知の差」「保護者対応」が挙げられた。これらは全て2年生の気づき項目であった。気づき項目のべ件数は2年生が多いものの、一人あたりの項目数にすると、4年生 (5.50件) > 3年生 (4.33件) > 2年生 (3.88件) となり、上級生になるにしたがい「気づき項目数」が多くなる傾向を示した。このことは、3年生や4年生は、同級生と下級生を広場の運営を担う「組織」として人をまとめ上げる過程や直接的に指導する場面において、または様々な環境にて学生相互が観察し合うことで学びを深めているといえる。

全気づき項目数の内、学生相互による気づき項目数が占める割合は全対象学生では63.01%であった。学年平均値は、2年生が62.24%、3年生が56.25%、4年生が44.83%であった。この結果により下級生の方が同級生や上級生を間接的に観察、または直接的に指導を受けることで多くの学びができていたことが明らかとなった。また、上級生であっても下級生から「指導する」ことにより「多くの学び」をしていると推察された。

表5 全気づき項目の件数(件)と学年別頻度(%) 5件以上

気づき項目	n	学年別気づき項目頻度(%)			備考
		2年生	3年生	4年生	
子どもとの関わり方できる人がある	24	82.61	50.00	16.67	積極的、ねらいのある、子どもに応じた、人見知りの子ども等の関わり方
事前準備、段取りが重要である	16	82.62	66.67	66.67	事前準備、事後整理(記録)、シュミレーション
気配りができる人がある	16	34.78	83.33	50.00	上級生から下級生へ、助言、注意力、配慮、援助等
リーダーシップ、指導力の優れた人がある	16	34.78	83.33	50.00	仲間をやる気にさせる雰囲気づくり等
広場は経験、成長の場になる	15	34.78	33.33	83.33	意識を変えるきっかけ、将来に役立つ等
運営には協力が重要、協調性が必要	14	8.70	83.33	100.00	チームワーク、同じ目標の共有、同じ意識等
コミュニケーション能力が大切である	12	34.78	33.33	33.33	言葉の使い分け、声掛け、挨拶、柔らかい言葉口調等
発達段階の知識が必要	11	39.13	33.33	0.00	発達段階知識の不足、人見知りの子どもへの対応、発達段階に見合った遊び提供が重要等
取り組む姿勢、態度	8	30.43	0.00	16.67	真剣に、積極的、全力で取り組む等
責任感・役割遂行	7	17.39	16.67	33.33	
人前で話す	5	21.74	0.00	0.00	説明、広場の進行等
広い視野、周りが見える	6	17.39	33.33	0.00	安全確保ができる、子どもを見守る等
イメージできる想像力	6	26.09	0.00	0.00	安全確保、予見等
子ども・保護者が楽しいで欲しい	4	8.69	0.00	33.33	
反省すると次回の工夫ができる	6	17.39	0.00	33.33	反省会や保護者アンケートを生かす等
達成感が得られる	5	8.69	0.00	33.33	
行動力がある人がある	5	13.04	0.00	33.33	

表6 学生相互の気づき項目の頻度(件)

気づき項目	n	学年別気づき項目頻度(件)		
		2年生	3年生	4年生
子どもとの関わり方できる人がある	24	19	3	2
気配りができる人がある、フォロー、援助等	16	8	5	3
リーダーシップ、指導力の優れた人がある	16	8	5	3
運営には協力が重要、協調性が必要	14	3	5	6
コミュニケーション能力が大切である	12	8	2	2
取り組む姿勢、態度	8	6	0	2
責任感・役割遂行	7	4	1	2
広い視野、周りが見える	6	4	2	0
イメージできる想像力	6	6	0	0
人前で話す	5	5	0	0
行動力がある人がある	5	3	0	2
上下関係のつながりの場、相互信頼	4	2	1	1
経験知、経験の差(上級生との)	4	3	1	0
保護者対応	3	3	0	0
学ぶ見習う仲間・先輩が多い、学ぶ意欲	2	0	1	1
優しさ(子どもに対する)	2	2	0	0
臨機応変な対応ができています	2	2	0	0
堂々とした姿	1	1	0	0
観察眼	1	1	0	0
模範を示す自覚	1	0	0	1
感情コントロール	1	0	0	1
リーダーとしての演技	1	0	0	1
全体を把握している	1	1	0	0
学生相互による学びの気づき小計	142	89	26	27
学生相互による学びの気づき平均値		3.87	4.33	5.50

(5) 参加頻度による気づき項目数の比較

上位学年の方が気づき項目数が多くなる傾向が認められ、その理由として種々の実習の経験が影響していると推察される。そこで、「経験」を積むことにより気づきに差が認められるかを検討するため、全学生を参加頻度別に分類して、一元配置分散分析を試みた。

また、実習経験がない2年生を参加頻度別に分類して同様に分析した。その結果、全学年と2年生ともに、3回の広場への参加・参画した学生は、1回のみで学生より統計的に気づき項目数が多くなることが明らかとなった(表7)。このことは、調査対象学生が主観的に感じていた「上級生は実習経験があり、その経験

知には見習う点が多い」という認識を裏付けることとなった。また、実習の経験がなくても、広場への参加を重ねることでより多くの気づきを促せることが示唆された。

表7 参加頻度別気づき項目件数

(上段：全調査対象学生 (n=35), 下段：2年次学生 (n=23))

参加回数 (回)		1	2	3	有意差
全調査 対象学生	n	10	10	15	
	mean	5.10	9.80	9.33	1<2 1<3
	SD	±3.04	±2.74	±2.61	
2年次学生	n	10	6	7	
	mean	5.10	8.50	9.57	1<3
	SD	±3.04	±4.04	±2.82	

* meanは平均値, SDは標準偏差p<0.05

(6) 今後の広場への参加意欲

自由記述法ではあるが、今後の広場への肯定的、積極的、意欲的な参加を記載した学生が、91.43% (35人中32人) あった。これは、受講学生のほとんどが次回以降の広場への参加意欲が強く、目的意識が高められたと考えられる。

本年度、本学で初めて開講された「実践演習Ⅰ」とそこで学んだことを発揮する演習の場である「広場」の運営が、異学年集団により展開された。受講学生の自由記述による気づきを考察すると、本年度用いた受講者構成は、学生相互に多くの気づきを生じさせ、貴重な学びの環境を創り出していたことが示唆された。また、広場の経験を重ねることがより多くの気づきを生むこと、保育実習と教育実習(幼稚園)の経験がない保育学生であっても「子育て支援実践の場」を経験することにより多くの気づきにつながる可能性がある。よって、本年度開講された実践演習Ⅰの受講学生の構成は、今後も継続して実施することが望ましいと考えられる。なお、気づき項目に関して、全項目が「肯定的な気づき」であり、「否定的な気づき」がなかったことは、今後の授業カリキュラムを創り上げる上で重要な事実であると考えられる。

5 まとめ

本学では、子育て支援ができる保育者(保育士・幼稚園教諭)養成を目的に新規科目子育て支援実践演習Ⅰを開講したところ、初年度の受講学生は異学年集団で構成された。保育実習と教育実習の経験がある上級生と実習経験がない下級生の学習集団で実践演習Ⅰ

(授業)と「広場」の企画・運営が展開された。本研究では、その過程での学生相互での気づきや学び合いを検討し、次のことが明らかとなった。

- (1) 対象となった35人の保育学生の気づき項目延べ件数は、279項目あり、項目数は73項目であった。
- (2) 一人あたりの実践演習Ⅰ全般に関する気づき項目数は上級生の方が多く、2年生と4年生では統計的有意差が認められた。
- (3) 全般に関する気づきの内、学生相互での気づき項目は63.01%であり、2年生が3、4年生よりも多くなる傾向があった。これは、2年生が上級生の取り組みを観察し、または直接指導を受けることにより自己課題が発見できていると考えられる。
- (4) 気づき項目で最も多かったのが「子どもとの関わり」であり、2年生の82.61%が回答していた。これは、広場に参加した親子と上級生の関わりと2年生自身の関わりと比較により得られた自己課題を回答したと推察される。
- (5) 気づき項目数は、学年が上がるにつれ多くなった。しかし、2年生では、参加頻度が多いほど気づきが有意に多くなり、参加経験がより多くの気づきを生むと考えられる。
- (6) 今回の調査では肯定的な回答のみで、否定的な回答は見られなかった。また、対象学生の91.43%が次回以降も「広場」への参加を希望しており、実践演習Ⅰを通して学生相互が学び合うだけでなく、それを次の広場にて生かしたいという高い目的意識につながられた。

6 付記

本研究の調査は、「わくわくキッズ広場」に参加した学生を対象とし、広場の開催にあたっては、平成23年度 おかやま子育てカレッジ地域貢献事業(岡山県備前県民局)の助成と平成23年度環太平洋大学特別研究費の助成を受け、IPU子育て支援実行委員会(委員長:勝田麻津子実行委員長(環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科学科長・教授))が主催した。

7 謝辞

本研究を進めるに当たり、多大なご助言、ご協力をいただいた次世代教育学部乳幼児教育学科 学科長勝田麻津子教授をはじめ、広場の運営にご協力いただいた諸先生方、調査対象として協力して頂いた子育て支援実践演習Ⅰ受講学生の皆様に心から感謝申し上げます。

8 引用文献・参考文献

- 1) 無藤隆監修 (2009), 幼稚園教育要領ハンドブック, 158-160, 学習研究社 (東京)
- 2) 土居隆子: 子育て支援力を育む授業内容の検討, 活水論文集第54号, 63-80, 2011
- 3) 柴倉初美, 塩見優子, 加藤由美, 藤井伊津子: 子育て支援事業「なかよし広場」の取組－子ども・保護者・学生の相互作用からみた支援のあり方－, 順正短期大学研究紀要第37号, 85-103, 2008
- 4) 野原真理, 宮城重二: 保育所における子育て支援事業への評価－母親の育児に関する意識および行動の変化－, 女子栄養大学紀要第36号, 63-69, 2005
- 5) 名須川知子, 岸本美保子, 小林みどり: 幼稚園における地域子育て支援活動の研究－兵庫教育大学附属幼稚園における園庭開放の意味－, 学校教育学研究第20巻67-82, 2008